

## 第一部小括 忘却された主体の来歴

第一部では、現代のリベラリズムの主張を主軸に据えて、「自律的な主体」という議論の出発点が設定されるさいに、どのような力が働いているのかを論じてきた。あらゆる個人を「自律的な主体」として想定することは、一方では、歴史的な負荷や傷を負わされてきた者たち 女性をはじめ、さまざまなマイノリティとしての烙印を押されてきた者たち を、国家の法の下に包摂し、平等な人格として扱うことを可能にした。しかし、他方で、この包摂は、主体内部においては、意志に対する自らの服従を促し、主体の外部においては、国家の統一的な意志、すなわち主権への服従を余儀なくさせる。

しかし、そのような服従が適わない存在、そもそも自らの意志の統御の下に行為し得ない者は、わたしたちの意識の外へ放擲されている。そのことが、わたしたちの問題として意識されないままでいられる装置こそが、リベラリズムを貫く公私二元論であった。

リベラルな公私二元論は、一つの国家において平等に包摂されているはずの市民同士の社会的責任を不問に付すことを可能にする。それは、依存する存在 ここには、依存する存在をケアする存在が必然的に含まれる を論理的にも、公的にも否認することで、市民の責任を、主権国家の原理の下で自らが確立した法に従う義務に縮減する。自ら確立した法にのみ従う者だけが、自律的な主体として自由な存在なのである。

他方で、自律的な存在でない、依存する存在として、市民たちの責任の埒外におかれた者たちと、依存する者のニーズに応える、という意味における責任を果たす者たちは、不自由な存在だとされ、公的な市民としては相応しくない存在とみなされる。しかし、公的領域には相応しくない者は、リベラルな公私二元論における私的領域へと排除されたかということ、そうではない。リベラルな公私二元論の残酷さは、私的領域を最も自由な自由意志の砦とするために、私的領域においてさえ、公的領域において不自由な存在は、存在さえせず、忘却されている。

依存する存在がこのように、包摂をめざしたはずのシティズンシップ論から排除されてしまうのは何故かを考えるために、わたしたちは、第二章において、自律的主体像を支える「自由論」を批判的に検討した。なぜ、他者への依存が自由に対する脅威とみなされるのか。その恐怖感を支えている自由概念とは、いったいどのような自由なのか、と。

わたしたちは、他者からの干渉や他者への依存に対して強い警戒心を抱く自由概念に依拠しながら、リベラリズムが他者との共存を可能にする社会構想をしてきたことを第二章で明らかにした。社会を構想するうえで目的でもあり、その前提ともみなされてきた自律的主体に想定されてきた自由とは、情念その他、自らの身体でさえも他者化してしまい、わたし に命令することこそが自由だと考える、「堅い意志」をもつ主意主義的な自由であった。

よりよい包摂を公的に実現するために前提とされた自律的な主体像が、依存する存在を厳しく公的領域から放擲するのと同様に、自律的な主体を支えている自由論もまた、主体

## 第 I 部小括

から、あまりに多くの感情や情念を放擲することを命じる。そして、最後に残されたのは、「障害のない領域、自分のやりたいことができる空虚な場所」であった[Berlin 1969: 144/341]。

なぜ自由であるために、わたしたちは多くのことを忘れて、不問に付したりしなければならぬのだろうか。もっといえば、自由な存在を尊重しようとする社会を構想しようとするさい、わたしたちはこれまで何を「忘却」してきたのだろうか。

第三章では、この問題にさらに接近するために、リベラリズムとフェミニズムの間に存在する緊張関係を、「主体」をめぐる攻防として捉えなおした。リベラルな「主体」は誰にでも開かれており、したがって、誰であっても原理的には自由で責任ある市民となりうる。しかし、ブラウンが論じるように、この「リベラルな主体」こそ、男性中心主義者なのである。ここに、現代のフェミニズムにおける公私二元論に対する やっかいな 問題が発生する。リベラルな主体が、リベラルな社会の構想の起点として存在するかぎり、あまりにも多くの存在や活動が、わたしたちの政治的な射程、社会正義の射程から不可視化されている。

責任論から自由論へ、そして主体論へと、リベラリズムの主張をフェミニズムの視点から批判的に考察してきたわたしたちは、ようやく、リベラリズム論のなかで、すっかり忘却されてきたかのような問いに出会うことができるだろう。すなわち、道徳的人格として尊重されるべきだと宣言された、この抽象的な個人が、この現実の中で偶発的な存在として生きていくなかで、いったい、いかにして「主体」として扱われる存在となってきたのか。

第 II 部で詳細に議論されるのは、なぜこの問いがこれまで論じられてこなかったのか、論じられないことで、どのような政治的な利益が誰のために守られてきたのか、である。そしてさらには、論じられてこなかったがゆえに、わたしたちに予め閉じられてしまっていた、新たな社会構想に向けての鍵を、そこから救いあげることである。